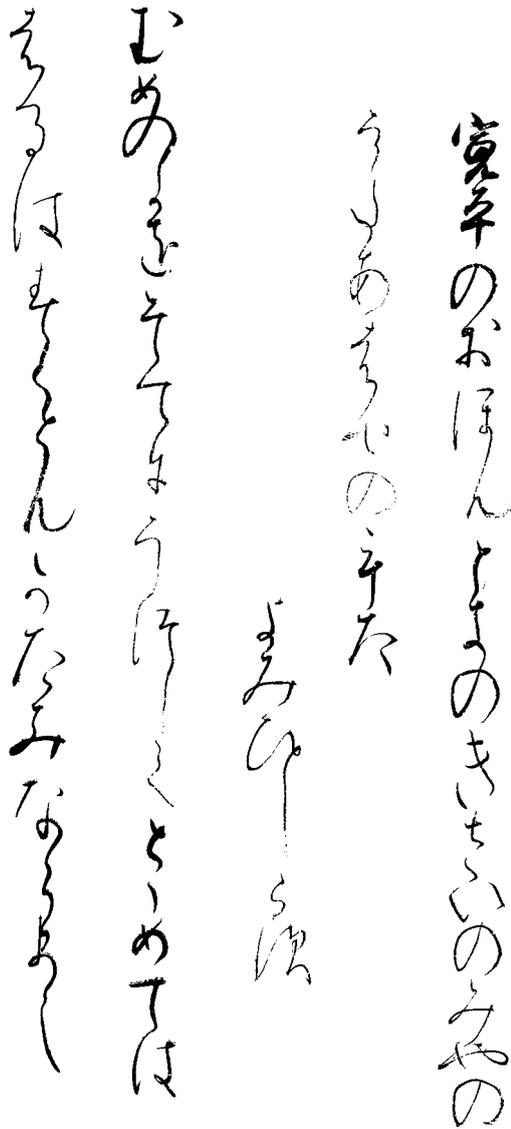


図8 高野切第一種（日本名筆選1）



（京都国立博物館所蔵）

詠み人知らず

梅の香を、袖に移して、とどめて「は」(ハ、バの両様に読める)、春は過ぐとも、形見ならまし

仮名は、このように、語句をブロック化して日本語の文章を表記するために形成された表音文字の体系であり、アルファベットと同じように、縦りに組み込まれて機能する文字であった。『源氏物語』若紫の巻に、幼女が仮名を「放ち書き」しかできず、和歌が書けないという一節があることは、連綿をせず仮名を並べても書記(writing)にはならなかったことを意味している。

【借字】 図9は、『古事記』(712)中巻に見える歌謡で、韻文による問答になっている。真福寺本は、現存最古のテキストであるが、鎌倉時代の写本で誤写が少なくない。第1行の途中から、活字に置き換えて示す。「袁(赤)」は、原本の「赤」を他の伝本のテキストで「袁」に訂正したことを表わす。

…即自其国越出甲斐坐酒折 宮之時歌曰迦比婆理都
久波袁(赤)須疑伊久用加泥都流尔其 御火烧
之(云)老人続御歌以歌曰迦賀那倍弓用迦波許々
能用比 迦波登袁(赤)加袁是以誉其老人即給東
国造也…

『古事記』は漢字文で叙述されている。漢字文とは、中国語古典文(いわゆる漢文)の構文をモデルにして漢字を配列する書記様式である。たとえば、「坐酒折宮之時」とは 酒折宮に高貴な人物がおいでになったときに という意味である。「坐」は敬語のイマスまたはマスに当てられている。漢字文は意味が取りやすいが、挿入される歌謡は日本語として正確に復元できなければならなかったので借字で表記されている。漢字に対応する日本語の語形を示す訓注や、対応する漢字のない擬声語などの表記も同様である。

借字とは、中国から借用した文字という意味である。日本語を表音的に表記するために、日本語の音節に近似する《音=発音》をもつ漢字を選択し、《義=意味》を捨て、《形=字形》を借用したものである。梵語(サンスクリット語)の表音的表記(摩訶・南無・阿弥陀)や、周辺諸国の固有名詞の表記(邪馬台・卑弥呼)などの応用であるから、日本人の独創ではない。初期の段階では外国人の関与があったであろう。刀剣の銘などが日本における古い例である。『古事記』の借字には陀羅尼と一致するものが少なくない。陀羅尼は表音的に表記された梵語の韻文で、中国古典文で記された仏典のテキストに挿入されているので『古事記』の歌謡を表記するモデルになったであろうし、本来の用法の漢字と紛れにくい文字が使用されているからである。

借字は、一般に、^{まんようがな}万葉仮名と呼ばれている。しかし、『万葉集』は文学作品であり、「恋」を「孤悲」と表記したり、鶴の群を「多頭」と表記したりする用法が少なくないので、表音文字の包括的な用語として適していない。^{まがな}真仮名とも呼ばれるが、^{まな}真字とは、仮名に対する正統の文字という意味で漢字を指す語であるから、この用語も適切でない。

借字の外形は漢字そのものであるから、借字で表記された歌謡が漢字文のテキストに挿入される場合には、漢字文の延長として読まれないように、歌謡の前には「歌曰」という断りがある。{7}の句が連続すれば歌謡は終わりであるから、あとには漢字文がそのまま続けられている。